

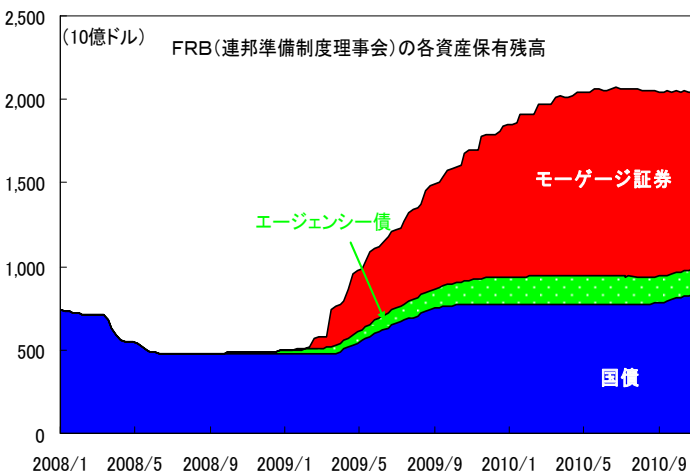
米国第2次量的緩和について

- ✓ 第2次量的緩和の規模は予想の範囲内で、市場の混乱は見られない。
- ✓ 積極的な緩和姿勢は、インフレ期待上昇の一要因であり、将来的な長期金利、ドル相場の反転材料に。

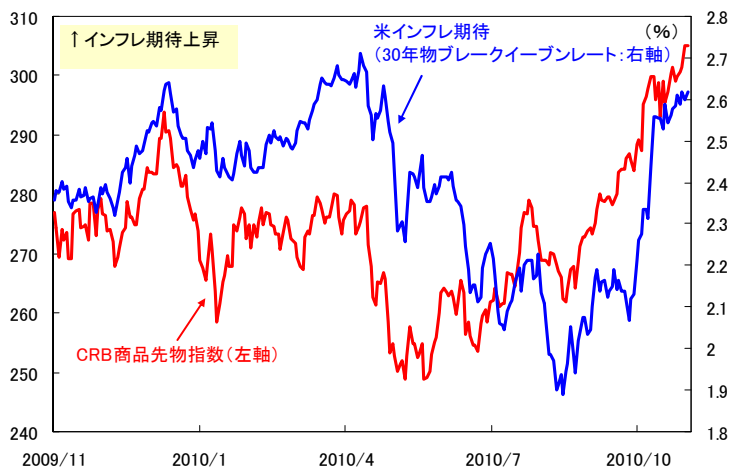
●米国金融当局は11月3日に、第2次量的緩和として、ほぼ市場予想の範囲内である「2011年4～6月期までに6,000億ドル、月間で約750億ドルの国債購入」を決定しました。MBS(モーゲージ証券)の償還分の再投資額である350億ドル程度と合わせると毎月、約1,100億ドル程度の国債購入となる計算です(図表①)。

●8月以降の米インフレ期待の上昇は、商品相場の反発やドル安を素直に反映したものとと言えますが、金融当局の積極的な緩和姿勢がそれらの動きを強めた面も少なからずあるものと見られます(図表②)。

【図表①】

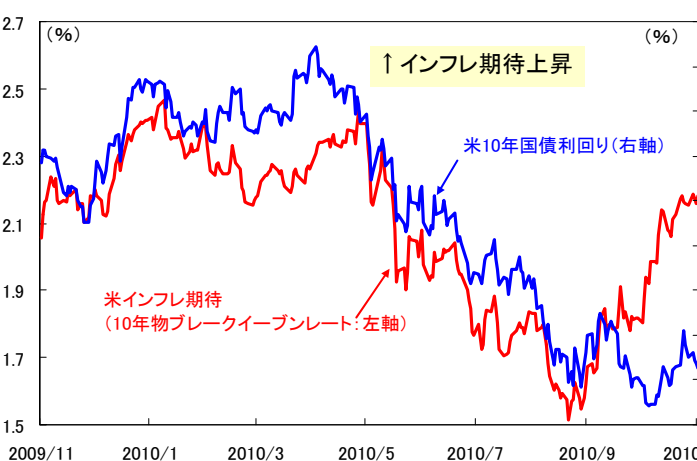


【図表②】

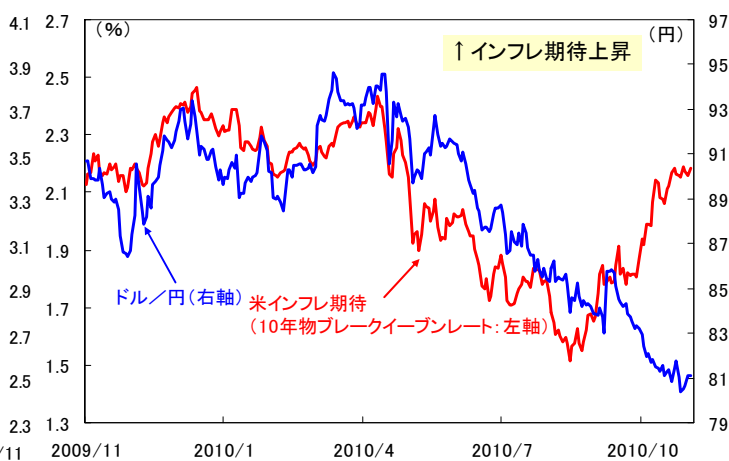


●追加量的緩和政策の効果は不透明ながらも、今後の経済指標によって米国景気回復ペースの強まりや市場が織り込んでいるインフレ反転上昇への確信度の高まりが確認されることとなれば、米国長期金利、ドル相場ともに反転の材料になるものと考えます(図表③④)。

【図表③】



【図表④】



出所: 図表①はFRB、その他はブルームバーグのデータを基にニッセイアセットマネジメント作成